

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：32619

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720015

研究課題名(和文)日本語における記憶表現の研究

研究課題名(英文)On Japanese Memory Expressions

研究代表者

櫻木 新(Sakuragi, Shin)

芝浦工業大学・デザイン工学部・准教授

研究者番号：90582198

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円、(間接経費) 420,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は日本語における記憶表現に焦点を当てる。分析哲学では他の多くの分析と同様に、記憶概念の研究は'remember'をはじめとする英語の記憶表現の検討を通して行われてきた。本研究では、日本語の記憶表現が詳細に検討され、英語の対応表現と比較された。また分析哲学において前提とされている一部の記憶概念が、'remember'の用法など英語の用法を前提としたものであることが明らかにされた。

研究成果の概要(英文)：This research illuminates memory expressions in Japanese. In analytic philosophy, the concept of memory is studied primarily through examining 'remember' and other English memory expressions. In this research, I closely examine Japanese memory expressions, and compare them to its corresponding expressions in English. I show that some concepts of memory presupposed in analytic philosophy are based upon how memory expressions as 'remember' are used in English.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：日本語の記憶表現 英語の記憶表現 日常的な記憶概念 記憶と知識

1. 研究開始当初の背景

人間の記憶は心理学を中心に、様々な経験科学の主題として色々な角度から盛んに研究されてきた。哲学においても同様に、記憶は主要な研究課題の一つであったと言える。しかしながら、20世紀後半の分析哲学においては1960～70年代にかけての、Norman Malcolm (*Knowledge and Certainty*, Prentice-Hall, 1963)やC.B. Martin and Max Deutscher ("Remembering," *Philosophical Review*, 1966)を中心とした一連の議論と、近年のSven Berneckerによる研究(*Memory*, Oxford, 2010など)を除くと、盛んに議論が行われてきたと言うことは難しい。

他方において、Sydney ShoemakerやDerek Parfitによって提案された人格の同一性についての記憶説や、近年では記憶知に関する議論など、記憶の概念が哲学上の議論に置いて中心的な役割を果たすことはまれではない。従って、哲学的な重要性を'knowledge'などその他の哲学的に重要な表現と比較しても、記憶表現の概念分析への取り組みの少なさは、特に顕著であると言えるであろう。

本研究の研究代表者である櫻木は博士論文("On Propositional Memory," University of Florida, 2007)において、'remember'がthat節を目的に取る際に表現する概念の分析を行った。分析哲学において伝統的に用いられてきた概念分析の手法においては、概念の分析はその表現の使用に関する直観を通じて検討されるが、通常この「表現」とは英語における表現のことを指し、例えば知識の概念の分析は'know'という表現に対して我々(つまり分析哲学者)がどういった直観を持つかを検討するのが一般的である。上記の記憶概念に関する分析も、この伝統の下で同様に'remember'と'recall'などといった英語における記憶表現とその関連表現に関して行われた。

従って、上記の博士論文は英語表現の示す概念についての研究であるが、その成果の一部を踏まえて「傾向としての記憶について」(哲学第61号, 2010)という日本語論文を執筆する際、'remember'が表現する様々な記憶概念を正確に日本語に表現することの難しさが明らかになった。そもそも'remember'は日本語では一つの表現では捉えることができないように思われる二つの意味(日本語では「覚えている」と「思い出す」に置き換えられる)を持つ。その他にも構文に関する違いなど、直観的に明らかな相違が指摘できた。それらの違いが哲学的な意味を持つのではないかと考えたのが、本研究開始の背景である。

2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、日本語の記憶表現、特に「思い出す」と「覚えている」が表現する記憶概念の分析である。この分析へのアプローチとして、英語の記憶表現と日本語の記

憶表現との比較が行われ、英語の表現する記憶表現がそのまま日本語の記憶表現によって表現されているのか、されていないとすればその違いは何であるのかを明らかにすることが目指される。それと同時に、その哲学的な含意が検討された。

しかし本研究のもつ意義は、記憶表現の概念分析にとどまるものではない。本研究は、ともすれば英語表現の分析に特別な地位を与えがちな分析哲学のアプローチを、日本語という他言語から検討し直すという取り組みである。もし日本語の記憶表現と'remember'の間に明確な概念的相違を見つげることができるとすれば、それは従来の分析哲学で議論されてきた'remember'の分析に、新たな洞察をもたらすことができるだけでなく、分析哲学におけるスタンダードとしての英語による概念分析の手法への問題提起としての意義を持つのである。

3. 研究の方法

本研究は開始当初、伝統的な分析哲学の手法である概念分析を中心に計画された。しかし研究の進展と共に、英語と日本語の記憶表現の微妙な違いを様々な角度から比較するために、言語学の手法を応用した研究方法が積極的に取り入れられた。

(1) 概念分析

概念分析においては、上述の先行研究などにおいて議論されている様々なシナリオを手がかりに、どのような記憶表現がどのような場面や状況で使われることが出来、どの表現が使われることが出来ないのかについての直観的な判断が詳細に検討された。日本語の記憶表現の分析は主として日本語ネイティブスピーカーである櫻木本人の直観を頼りに遂行されたが、英語表現の分析については先行研究の議論だけでなく、William Butchard博士をはじめとする英語ネイティブスピーカーの分析哲学者の意見も参考にしながら進められた。

(2) 言語学の方法の応用

伝統的な分析哲学における概念分析の手法はそれ自体において確立されたものである。しかし本研究では近年の実験哲学の試みを踏まえ、経験科学の手法を取り入れることで直観的な議論をより客観的に説得的な仕方で行うことが目指された。具体的には言語学の方法の応用が模索された。

コーパスの積極的活用

英語、日本語の両言語における記憶表現の実際の使用が確認するために、The Corpus of Contemporary American English: 450 million words, 1990-present (Mark Davies, 2008-, <http://corpus.byu.edu/coca/>)のような英語コーパス、そして現代日本語書き言葉均衡コーパス(中納言(国立国語研究所))

および NINJAL-LWP for BCCWJ (国立国語研究所、Lago 言語研究所) や筑波ウェブコーパス (筑波大学・国立国語研究所・Lago 言語研究所 『NINJAL-LWP for TWC』 (<http://corpus.tsukuba.ac.jp>)) のような日本語コーパスが積極的に活用された。これらのコーパスを利用し、'remember' と「覚えている」「思い出す」の使用頻度やコロケーションの比較など、用法の類似と相違が検討された。

アンケート調査の実施

さらに本研究では、William Butchard 博士の協力を得て、上記の概念分析によって得られた直観的な観察を、アンケート調査によってさらに確認することが試みられた。'Remember' の二つの用法の違いを説明する伝統的な理論を踏まえ、複数のシナリオを作成した。アンケートでは、それらのシナリオのそれぞれに関して、登場人物が記憶を持つかどうかを尋ねる複数の質問を、英語アンケートにおいては 'remember' の二つの用法を用いて、日本語アンケートにおいては「覚えている」の二つの用法を用いて尋ねた。このアンケートは、アメリカと日本でそれぞれ英語ネイティブスピーカーと日本語ネイティブスピーカーを対象に実施された。

4. 研究成果

(1) 英語の記憶表現と日本語の記憶表現の比較

'Remember' は様々な種類の目的語を取ることができるが、そのうちのいくつかの用法はそれぞれ異なる含意を持ち、異なる記憶概念を表現するとされる。伝統的に 'remember' が that 節を目的に取る場合、それが表現する記憶は命題記憶 (例えば Bernecker, *ibid.* 15) と呼ばれ、ある特定の記憶概念を表現すると考えられてきた。命題記憶と異なる種類の記憶としては、手続き記憶と経験 (知覚) 記憶を挙げることが出来る。手続き記憶は 'remember' が how 節を目的に取る場合に、経験 (知覚) 記憶は動名詞句や 'what it was like to...'、'the feeling of ...ing' といった一連の表現を目的に取る場合に典型的に表現される。

命題記憶の概念の解明

本研究では、櫻木が博士論文で取り扱った命題記憶の概念分析を更に進展させ、特にその認識論的な重要性を明らかにした。

命題記憶は、それが時に事実記憶 (例えば Malcolm, *ibid.* 203-4) と呼ばれることから明らかなように、その内容の真理を含意する。'Remember that' が factive であるというこの事実を最もうまく説明してくれる立場として、命題記憶に関する認識説と呼ばれる立場が存在する。一般的に、'remember that' は factive であるのみならず、同じ内容の命題知識の存在を含意するとされる。こ

の直観に基づき、認識説は、命題記憶とは端的に命題知識の保持であると主張する。

認識説に対しては Martin and Deutscher (*ibid.*, 167-8) をはじめ、'remember that' が同じ内容の命題知識 ('know that') の存在を含意しないとされる様々な反例が提起されている。そして、それらの反例の分析を通じ、命題記憶は実際には命題知識の保持ではなく、他の種類の命題態度の保持であるという主張が提出されてきた。本研究では、命題記憶の概念分析の一環として、これらの認識説に対する反例とされるケースの分析に取り組み、その成果を "Propositional Memory and Knowledge," (Shin Sakuragi, *Logos and Episteme*, Volume IV, 2013) にまとめた。本論文では、それぞれのシナリオを細かく分析することで、それらのケースは実際にはすべて、命題記憶が同じ内容の命題知識を伴わないと明確に言い切ることができるようなものではないことを明らかにした。そして更に、それらのシナリオが曖昧さを残さず明快に命題記憶が命題知識を含意しないケースとして記述できない理由が存在することを示した。

経験記憶の概念の解明

命題記憶の概念の解明の一方で、本研究は経験記憶と命題記憶の概念の違いの解明にも取り組んだ。命題記憶と比較すると経験記憶 (知覚記憶) の概念は必ずしも明白ではないが、その一方で、経験記憶を命題記憶から区別することの出来る特徴として、質的な内容の存在を挙げることができる。"David remembers eating breakfast" や "David remembers what it was like to eat breakfast" が真であると見なされるためには、David は朝食を食べた経験の質的な内容を保持している必要があるとされる。例えば、David 自身は朝食を食べたときのことを一切思い出すことが出来ないが、誰かが David に彼が朝食を食べていたのを見たと言ったために、彼が朝食を食べたことを確信しているような場合、"David remembers that he ate breakfast" は真であり得るが、その場合には "David remembers eating breakfast" は真であると見なされることはない。

このような命題記憶と経験記憶の概念的な違いは、日常的なやりとりの中で、常に明確に区別されて表現されているとは言えない。しかし、これらの概念はそもそも 'remember that' と 'remember ...ing' という 'remember' の二つの異なる用法の分析から導かれたものであり、英語においてはこの 2 つのカノニカルな表現に訴えることで、常に命題記憶と経験記憶のどちらの記憶概念が示されているのかを明確に区別することが可能である。'Remember' に対応する代表的な日本語の動詞表現として「覚えている」や「思い出す」の二つを挙げることができるが、本研究は、'remember that' と 'remember

...ing'の示す概念的な相違が、これらの動詞を用いて明確に表現することが出来るかどうかを詳細に検討した。

「覚えている」や「思い出す」といった表現を使って命題的な記憶に言及する場合、通常「こと」「の」といった形式名詞が用いられる。その一方で、明確に経験記憶に言及できるような表現は明らかではなく、実際には命題記憶だけではなく経験記憶もこれらの形式名詞を用いて表現されることが通常である。

実際には「こと」と「の」の二つの形式名詞の用法には違いが存在し(久野暉「日本文法研究」大修館書店,1973,140-1、日本語記述文法研究会「現代日本語文法6」くろしお出版,2008,18-23)、「見る」のような典型的な知覚動詞は「の」を伴うが、「考える」のような動詞は「こと」を伴う。この違いを踏まえると、「ことを覚えている(思い出す)」は命題記憶を「のを覚えている(思い出す)」は経験記憶を表すと主張出来るようにも考えられるが、本研究では実際にこれらの「こと」と「の」の違いが「覚えている」の意味に影響を与えるかどうか、アンケート調査を通じて検討された。

このアンケート調査は、英語ネイティブスピーカーに対して、6つのシナリオに登場する人物がそれぞれ'remember that'しているかどうかが、また'remember ...ing'しているかどうかが尋ね、日本語ネイティブスピーカーに対しては、「ことを覚えている」と考えるか、「のを覚えている」と考えるかどうかが尋ねた。アンケート調査の結果、英語ネイティブスピーカーが'remember that'と'remember ...ing'を明確に区別して理解していることが確認できた一方で、日本語ネイティブスピーカーは「こと」と「の」を同じような仕方で区別していると認めることは出来なかった。このことから、二つの形式名詞の使い分けによって'remember that'と'remember ...ing'の違いが表現されていると考えることは出来ないことが明らかになった。

異なる種類の経験記憶とその日本語表現の検討

英語に於ける経験記憶の表現として'remember ...ing'以外にも、'remember the feeling of ...ing'のような表現が存在する。本研究では、これらの表現の持つ因果的な含意を検討し、それぞれ含意が微妙に異なることを示した。'Remember the feeling of ...ing'における経験記憶の内容は'...ing'した経験の感覚であるという点において、'remember ...ing'との間に違いは無く、二つの表現が示す経験記憶の概念の違いはないように思われる。しかし実際には、'the feeling of ...ing'が間接的な仕方でしか過去に由来しないケースを想像することは可能である。例えば'A-ing'の感覚を保存し、

後に心の中に再生するような機械を想像しよう。このような機械を利用すれば、'the feeling of A-ing'の記憶が一度失われたのちに、再び全く同じ記憶内容を再生することは可能であるに違いない。例えば、この機械を利用して'the feeling of A-ing'の記憶を再び取り戻した場合には、'remember the feeling of ...ing'は真であると見なされるであろう。しかしこのような場合に'remember A-ing'が真であると見なされることはないのである。

'Remember ...ing'と同様に、日本語において経験記憶を一義的に表現したいときには、「時の感じ」といったように感覚に直接に言及するような表現に訴えるのがより自然である。本研究では、これらの表現が'remember the feeling of ...ing'と同じように、厳密には'remember ...ing'とは異なる因果的な含意を持つことを示した。

'Remember'と日本語の記憶表現の違いがもつ哲学的含意の検討

本研究では、日本語に'remember ...ing'と全く同じ因果的な含意を持つ表現が存在しない、という上述の点がもつ哲学的な含意を検討し、その一例として、ロックに由来する人格の同一に関する記憶説の定式化の問題を明らかにした。人格の同一性に関する記憶説は、典型的に「XとYが同じ人格であるのはXがYの行為Aについて'remember A-ing'にする時である」というような形で、'remember ...ing'に訴えて表現される(例えば D. Parfit, *Reasons and Persons*, Oxford University Press, 1984, 205)。

しかし日本語に'remember ...ing'と全く同じ因果的な含意を持つ表現が存在しないとすれば、日本語ではこの説を同じような仕方で定式化することは不可能であることになる。本研究はこの点から、ロック流の記憶説のこの定式化は、英語には'remember ...ing'というある特定の因果的な含意を示す経験記憶の表現が存在する、という一種の偶然に依存するものであることを明らかにした。

(2) 「思い出し」の研究

状態動詞としての「覚えている」と出来事動詞としての「思い出す」

本研究では「思い出す」の表現する概念を検討し、特に「覚えている」との間の概念的な関係を明らかにした。英語における記憶動詞は、状態を表すものと出来事を表すものとに区別できる。本研究では同様の区別は「思い出す」と「覚えている」の間にも見ることが出来るが、その関係は必ずしも英語と同じでは無いことを明らかにした。

英語には'remember'の他にも'recall'など記憶を表す動詞は複数存在する。しかしコーパスを確認すれば、'remember'とその他の記憶動詞の使用頻度の差は明らかである。このことから'remember'が英語において記憶

を表現する際に、最も一般的に使用される動詞であることが推測される。

'Remember' と 'recall' の二つの記憶動詞は、その主要な使用法において異なる種類の動詞である。'Remember' は、少なくとも最も一般的な用法では記憶状態を表し、"I just remember" や "Now I remember!" という表現のように、出来事に言及する用法は存在するが（例えば S. Munsat, *The Concept of Memory*, Random House, 1966, 52-3）、それほど一般的であるとは言えない。他方、'recall' は通常、何らかの出来事を表す。

本研究では、「覚えている」と「思い出す」の用法を日本語コーパスで確認した。例えば「今、思い出した」と言う時のように、「今」という表現は「思い出す」と一緒に使われる際には、そのときに生じた心的出来事を言及する一方で、「覚えている」と一緒に使われる場合には「今も」や「今でも」といった形を取り、過去から現在に続く状態を表すのに使われるのが通常である。このことから、「覚えている」と「思い出す」はそれぞれ 'remember' と 'recall' の一般的な用法に一致し、「思い出す」は心的出来事を、「覚えている」が心的状態を表すと考えるべき理由が示された。

傾向としての「覚えている」

'Remember' と 'recall' の使用頻度や記憶状態と出来事の概念的な関係を踏まえると、出来事としての 'recall' は、'remember' によって表現されるような、ある記憶状態が明示 (manifest) されたものであると考えることが出来る(櫻木, *ibid.*)。しかし本研究では、同様の分析を「覚えている」と「思い出す」の二つの概念に適用するには一定の問題が存在することが明らかになった。

第一に、(1) で明らかにしたように、'remember' は複数の異なる記憶概念を表現する。従って 'remember' の分析は、'remember that,' 'remember ...ing,' 'remember how' など、それぞれ異なる記憶概念を表すカノニカルな表現ごとに与えられると考えるのが自然である。とりわけ、命題記憶と経験記憶の違いは明らかであるから、それぞれのカノニカルな表現である 'remember that' と 'remember ...ing' (もしくは 'remember the feeling of ...ing' など) に対して、異なる分析が与えられる事になる。しかし「覚えている」が 'remember that' と 'remember ...ing' の違いを明確に示すことは出来ない以上、同様のアプローチを日本語に適用するには明らかな困難が存在する。

第二に、「覚えている」と「思い出す」の使用頻度をコーパスで確認すると、その比率が 'remember' と 'recall' とは大きく異なることが確認できる。日本語において最も使用頻度の高い記憶動詞は「思い出す」であり、「覚えている」ではない。この違いを踏まえると、'recall' と 'remember' の間の概念的な

関係が、そもそも「覚えている」と「思い出す」の間に同じように成立するか強い疑問が残るのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

Shin Sakuragi, "Propositional Memory and Knowledge," *Logos and Episteme: VI* issue 1, 2013, 69-83 (査読あり)

[学会発表](計8件)

Shin Sakuragi, "Memory Expressions and Linguistic Methods," *Empirical Methods of Linguistics in Philosophy* (Technische Universität Dortmund, Germany), 2014年3月13日

櫻木新「『覚えている』と『思い出す』」日本論理哲学会(アルカディア市ヶ谷) 2013年12月7日

Shin Sakuragi, "Remember Doing" and the Lockean Memory Theory of Personal Identity," *Dreams, Phantasms and Memories* (The University of Gdańsk, Poland), 2013年9月20日

櫻木新「Remember Doingに関する考察」日本イギリス哲学会(東北大学) 2013年3月26日

Shin Sakuragi, "Memory Knowledge and Its Epistemic Grounds," *Knowledge, Reality and Value* (the Society for Indian Philosophy and Religion) (Best Western Premier, Vedic Village, Kolkata, India) 2013年1月4日

櫻木新「忘れられた証拠と基礎付け主義」日本論理哲学会(アルカディア市ヶ谷) 2012年12月1日

櫻木新「日本語の記憶表現について」日本科学哲学会(宮崎大学) 2012年11月11日

櫻木新「『覚えている』とは」日本論理哲学会(アルカディア市ヶ谷) 2011年12月3日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

櫻木 新 (SAKURAGI, Shin)
芝浦工業大学・デザイン工学部・准教授
研究者番号: 90582198

(2) 研究分担者

なし